



管内は広く、地区ごとに気候や地質、地形などが異なるため、温州ミカンなどの柑橘類の品質にはバラツキがあります。

一方、レモンは、糖度よりも鮮度や果汁量が重視されるため、品質の統一化が可能で、量・質ともに良好な生産が見込めます。

レモン栽培のメリット

1 品質の統一化が可能

管内は広く、地区ごとに気候や地質、地形などが異なるため、温州ミカンなどの柑橘類の品質にはバラツキがあります。

一方、レモンは、糖度よりも鮮度や果汁量が重視されるため、品質の統一化が可能で、量・質ともに良好な生産が見込めます。

2 歴史的価値によりブランド化が見込める

文献などの資料から、当JA管内の熱海市は国内レモン栽培発祥の地と判明しています。歴史的価値からブランド化が見込めます。（発祥の地については次のページで説明）

3 他の柑橘類と比較して単価が高い

東京都中央卸売市場の令和4年実績によると、レモン単価は1kg393円、早生ミカンは1kg297円で推移しています。

4 原料としての引き合いが強い

国内最大のレモン産地、広島県ではレモンの加工率は28・1%（平成27年特産果樹生産動態等調査）で、加工原料としての引き合いが見込めます。

5 労働時間が短い

令和3年発行の「細野賢治著 関西大学経済論集『国産レモンの生産振興を図るためのサプライチェーン―広島県産レモンの取組を事例として―』」には次の記述があります。

「早生温州のマルチ栽培の労働時間は年間229時間となっており、ピークの11月は収穫・出荷労働のみで80時間を超えている。一方、レモンは年間141時間であり、ピークの4月も50時間を超えず、そのうち収穫・出荷労働は26時間である」



栽培で注意すべき点

木のトゲに注意

作業しやすい環境をつくることが重要です。品種選択に注意することが大事です。

かいよう病に弱い

かいよう病が他の柑橘類に比べ出やすい性質があります。温州ミカンとは違う防除が必要で、防風対策や夏秋梢の処理も重要です。

寒さに弱い

最低気温がマイナス3度を下回る地域では、樹勢が衰えたり枯れたりする場合があり、ます。冷気の溜まりやすい場所は避けます。

生産拡大方針

当JAは、食の安全・安心を第一として、消費者のニーズに沿った栽培方法をすすめます。強い酸味の一般品種の引き合いが強いため「ユレカ」「リスボン」「ピラフランカ」の一般品種を主体とする栽培で営農アドバイスをを行います。

●レモンの主な品種特性

品種名	樹勢	樹姿	トゲ	耐寒性	春花の収穫期(月)	酸味	その他特徴	推奨例
ユレカ	弱	開帳性	中	弱	10~12	強	四季咲き性が強い	温暖で比較的平坦な園地
リスボン	強	直立性	多	強	10~12	強	結果樹齢に達するのが遅い	寒さが心配な園地 大きなトゲがあってもよい人
ピラフランカ	強	直立性	少	中	10~12	強	隔年結果性が少なく豊産性	樹が小ぶりなので傾斜地に向く トゲは小さい方がよい人

SPECIAL FEATURE 特集

国内レモン栽培発祥の地は熱海市 栽培振興の取り組み始動

当JAは、本年度から始まった2か年計画・自己改革工程表の「主要品目の生産振興」の一つに「柑橘」を掲げ、「レモン生産の拡大」に取り組んでいます。

国内レモン栽培発祥の地とされる、あいら伊豆地区管内の熱海市。発祥の地の名の下に産地化を図る取り組みを特集します。

管内をレモン産地に レモン栽培はメリット大

レモンの生産拡大は、昨年度の生産組織とJAとの意見交換会関連施策として組合員の意見を反映させた取り組みで、統一ブランドを創造し、ブランド化を目指します。

令和7年にはレモンの栽培面積を1ヘクタール、令和8年にはその倍、令和13年には20ヘクタールにする行動指標を定め、レモン生産拡大のための生産販売体制を確立していきます。

レモン栽培には多くのメリットがあり、当JA管内で産地化が見込めます。富士地区では柑橘部会による試験栽培が始まり、あいら伊豆地区ではレモン研究会を作り組織化も進めていきます。左記にレモン栽培のメリットと注意すべき点をご紹介します。



営農販売部 営農課
あさだ ひろし
浅田 宏

農薬・化学肥料を低減してレモンを栽培

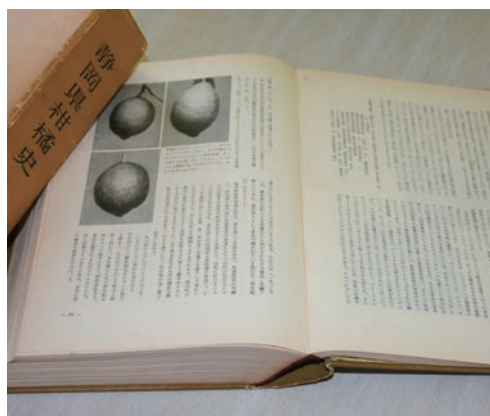


レモン栽培発祥の記述を示す西島さん

発祥の地でブランド化を提案

西島洋一さんは、熱海市でレモン栽培を行う中で、静岡県柑橘販売農業協同組合連合会（静柑連・後にJA静岡経済連と合併）が昭和34年に発行した「静岡県柑橘史」に「熱海のレモンは明治初年、某外国人が同地の富士屋旅館に來遊し、食膳に出されたレモンから種を得て栽培された（要約）」とあることを知ります。

さらに、平成16年開催の「JAあいら伊



熱海が国内レモン栽培発祥の地の根拠となる「静岡県柑橘史 静柑連・昭和34年発行」

豆柑橘生産者大会記念公演」で、神田川菜翁さん（東京青果卸売協同組合連合会常務理事など歴任）が「東京神田市場頭取の鶴岡辰五郎の日記に「明治6年、外交官のスペイン人宣教師を熱海の旅館に世話した。この時にレモンの種をまいた」とある。このレモンが増殖されて、伊豆東海岸を南下し、和歌山、広島に伝わった。熱海市は国内レモン栽培発祥の地」と述べたことから、発祥の地を確信しました。

栽培では、農薬・化学肥料の使用を低減してレモンを生産しています。「就農当時はかいよう病の防除に苦労したが、今は農薬も改良され、農薬・化学肥料を低減して生産が可能」と言います。

西島さんのレモンは、直売所「いで湯」こ市場で販売し、人気商品です。

西島さんは「熱海のホテルや事業者から引き合いがあるが、現在は生産量不足から提供が困難」と各方面でレモン需要があることを指摘。「JAふじ伊豆になったことで、生産量もまとまる」と今後に期待を寄せます。



直売所で人気商品の地元産レモン



にしじま 西島 洋一さん（73）

あいら伊豆柑橘部会副部会長を務める。静岡大学農学部で学び、静柑連に勤務後、昭和52年熱海に帰り実家の農家を継ぐ。当時、静柑連発行の「柑橘」誌でレモン栽培をすすめる記事を見て、平成元年前後からレモン栽培を開始。現在はレモンを約7アール栽培。



あいら伊豆地区柑橘担当の森梓（森梓）と栽培について話す西島さん

茶からレモンへの改植を前向きに検討

富士地区 小野 湧太郎さん

茶園をレモン畑に 営農担当者らが改植地を確認

富士市大淵地区で茶の生葉を生産する小野湧太郎さん（30）は、約10ヘクタールある茶園で、レモンへの改植を前向きに検討しています。

改植を検討するに当たり7月、営農課などの職員とJA静岡経済連、県富士農林事務所の職員ら6人が、小野さんが改植を検討している茶園を訪れ、レモン栽培が可能か確認を行いました。現地確認では、気温や日照、風当たりなどを細かく確認。小野さんは、営農課の浅田宏職員から、レモンの品種ごとの特性や改植に際しての土壌改良、レモン栽培のメリットや注意すべき点など詳しい説明を受け、小野さんも質問するなど熱心に意見交換を行いました。

小野さんは「生葉価格の低迷で、茶園を将来どうするか悩んでいた。大淵地区は冬場に冷え込むが、品種特性で解決できる可能性もあると知った。20アールから試験栽培を始め、前向きに検討したい」と意気込みます。



浅田職員からレモンへの改植について説明を受ける小野さん（右）

浅田職員は「レモン栽培を検討される組合員の方が手を挙げてくれて手応えを感じる。生産者と積極的に意見交換し、レモンの産地化を進め、農家組合員の農業所得の向上に貢献したい」と話します。

大淵地区を担当する、大淵営農経済センターの岩山康治センター長は「大淵地区に新たな特産品を作ることができればいい」と意欲を見せました。



小野さんが改植を予定している茶園



レモン栽培に関する お問い合わせ

レモン栽培に関心のある方は、最寄りの営農経済センター、または営農販売部 営農課（TEL.055-957-8032）までお気軽にお問い合わせください。

